

北沢楽天とは誰か——漫画・子ども・手塚治虫

宮田 航平

一、北沢楽天と「漫画」

埼玉県の大宮公園近くの盆栽町には、日本初の公立漫画美術館がある。昭和四十一年、漫画家の北沢楽天が晩年を過ごした「楽天居」の跡地に建てられた大宮市立漫画会館（現・さいたま市立漫画会館）は、楽天のアトリエを保存・公開するとともに、常設展示としてその業績を顕彰する。

北沢楽天とは、どのような人物なのだろうか。たとえば漫画会館のホームページでは、楽天のことを「日本近代風刺漫画の祖」と紹介している⁽¹⁾。じつは、日本の近代漫画は、西洋の風刺漫画の影響を受けて誕生した。日本初の漫画雑誌となったのは、イギリスの漫画雑誌『パンチ』を模して作られた『ジャパン・パンチ』で、横浜の外国人居留地で刊行されたものであった。西洋から本格的な印刷技術が入ってくるなかで、新聞・雑誌などの定期刊行物が増えていき、日本でもビジュアルとしての風刺漫画が大きな位置を占めるようになっていく。そのような時期に大変な人気を集めたのが、「日本近代風刺漫画の祖」としての北沢楽天であった。

『日本近代文学大事典』における「北沢楽天」の項目には、次のように記されている。

明治九・七・二〇～昭和三〇・八・二五（1876～1955）漫画家。埼玉県生れ。本名保次。旧幕時代に家が幕府側小藩の重役だったので官途をきらって明治二八年横浜にいつて米人漫画家について漫画を描きだす。三八年四月漫画誌「東京パック」を創刊、するどい諷刺と明快な画風で人気を得、大衆から楽天漫画といわれた。大正から昭和初期には大御所的存在になり多くの門下を育成した。没後、郷里大宮市に楽天を記念する漫画会館が設立されている。⁽²⁾

横浜の「米人漫画家」とは、オーストラリア出身の漫画家フランク・ナンキベルのことである。明治二十八年、横浜の外国人居留地にあるボックス・オブ・キュリオス社に入社した楽天は、同社で週刊英字新聞『ボックス・オブ・キュリオス』の漫画欄を担当していたナンキベルに漫画を学び、やがて後任を務めることとなる。

漫画の仕事をはじめた楽天に目を付けたのが、時事新報社の福沢諭吉と今泉一瓢であった。明治三十二年、二人に招かれて同社の絵画部員となった楽天は、週一回の漫画欄「時事漫画」の主筆として、存分に腕を振るっていく。

ただし、楽天が日本初の職業漫画家と言われるほどの人気を持つに至るまでの決定的な契機としては、漫画雑誌『東京パック』の存在を忘れてはならないだろう。『日本近代文学大事典』には、「東京パック」の項目も立てられている。

漫画雑誌。明治三八・四〇大正四・一一まで確認。北沢楽天主宰。有楽社発行。四六四倍判一六ページで当初は月二回刊行。編集プランを楽天が立て、坂本繁二郎、川端龍子、森田恒友、山本鼎、石井鶴三ら若い漫画家が分担して執筆した。いちじは発行部数五万に達し、「東京ハービー」「上等ポンチ」など追随誌も出現した。明治四五年、経営権が中村弥次郎から他に移ったため、楽天は別に「楽天パック」「家庭パック」をはじめたが、「東京パック」はなおしばらく続いた。⁽³⁾

アメリカの漫画雑誌『パック』を意識して作られた『東京パック』は、日本初のカラー漫画雑誌で、漫画によって埋め尽くされた大判の誌面も相まって、大変なインパクトを持っていたようである。創刊当初こそ月刊であったが、好調な売り上げを受けて、翌年には月二回刊行となり、さらには増刊号『贅六パック』なども発行することで旬刊化する。

また、『東京パック』の刊行時期について、『日本近代文学大

事典』では「大正四・一一まで確認」とあるが、それ以降も断続的に刊行が続けられていく。⁽⁴⁾ただし、楽天が直接関わったのは、いわゆる第一次『東京パック』（明治三十八年四月〜明治四十五年五月）のみであった。

『東京パック』から離れた楽天が力を注いだのが、新たに創刊した『楽天パック』（明治四十五年〜大正三年）と『家庭パック』（明治四十五年〜大正二年）である。どちらも比較的短命に終わってしまうのだが、楽天が視覚性を活かした雑誌メディアに関心を持ち、試行錯誤していた様子が窺える。次はどんなことに挑戦していくのだろうか。

そのヒントは、『児童文学事典』の「北沢楽天」の項目にある。『児童文学事典』は、『日本近代文学大事典』の約十年後に出版された、児童文学・児童文化に関する事典だ。

東京神田錦華小学校卒業後、絵画研究所で洋画を学び、のち横須賀の春瑞塾で日本画を修業した。一八九五年横浜の英文雑誌ボックス・オブ・キューリオス社に入社。漫画家フランク・ナンケベルに師事し、同誌に作品を発表して認められた。九九年福澤諭吉に招かれ、時事新報社に移り、政治風刺漫画を描き、〈楽天漫画〉として知られるようになる。一九〇五年（明38）「東京パック」を創刊、十数万部を発行し、漫画ブームをつくり、多くの門下生を育てた。一四年羽仁もと子によって「子供之友」が創刊されると積極的に協力する。二九年ヨーロッパ、アフリカなど一年半の旅をし、途中パリで日本の風俗画の個展を開く。第二次大戦後は郷里大宮市に住み、自適の生活を送った。旧居跡

(大宮市盆栽町一五〇番地)は現在、楽天記念大宮市立漫画会館となり、漫画に関するさまざまな資料が公開されている。⁵⁾

じつは、この十年の間に、北沢楽天顕彰会により『楽天漫画集大成(全三巻)』(グラフィック社、昭和四十八年四月〜昭和五十一年五月)や『楽天』(北沢楽天顕彰会、昭和五十五年五月)が刊行されるなど、楽天の伝記的・書誌的な整理が進められてきた状況がある。

また、この時期には、漫画・風刺画研究者の清水勲が関わる『近代漫画(全六巻)』(筑摩書房、昭和六十年五月〜昭和六十二年五月)や『漫画雑誌博物館(全十二巻)』(国書刊行会、昭和六十二年六月〜昭和六十二年五月)が発行され、『復刻版東京パック(全八巻)』(龍溪書舎、昭和六十年五月〜平成十二年五月)の刊行も始まるなど、戦前に漫画が掲載された新聞・雑誌の紹介や復刻が集中的に行われた。先の事典項目は、それらの研究の成果が反映された記述にもなっている。

ここで新たな記述として注目したいのが、『子供之友』への楽天の関わりである。『楽天パック』や『家庭パック』の次の挑戦として、楽天はどのように『子供之友』に関わっていくのだろうか。

二、北沢楽天と「子ども」

西洋から入ってきた本格的な印刷技術は、『東京パック』などの漫画雑誌を生み出したが、同じく視覚性を重視する絵雑誌

の創刊も後押しした。特に絵雑誌は、大正自由教育運動とも密接に関わりながら、誌面を作っていく。楽天が関わった『子供之友』も、その絵雑誌のうちの一つであった。

一九一四年(大3)四月創刊。家庭の子どもを対象とした月刊総合雑誌、四三年一二月用紙制限による休刊まで三五七冊刊行。婦人之友社の羽仁吉一が編集兼発行人を務め、主幹羽仁もと子、絵画主任北沢楽天、編集主任河井醉茗で出発。一七年より野辺地天馬、二九年上沢謙二、三〇年羽仁説子が編集に参画。二三年から自由画選評に山本鼎、二六年から自由詩選評に西条八十、河井醉茗が当たる。絵画は北沢楽天、竹久夢二、村山知義、武井武雄、岡落葉、田中良、清水良雄、岡本帰一、川上四郎、河目悌二、深沢省三、深沢紅子、夏川八朗(柳瀬正夢)、木下繁ら、文は編集長を務めた前記四名のほかに村山篤子、西条八十、与謝野晶子、北原白秋、水谷まさる、葛原齒、武田雪夫らが執筆。「…」新しい教育雑誌をめざし子どもの興味に関心が払われ、切り抜き絵、観音開き、からくり絵など工夫が凝らされた。「…」毎号掲載された絵ばなし『甲子上太郎』から「甲子上太郎生活新聞」が、村山知義、篤子による連載『三匹の小熊さん』から線映画(アニメーション)が生まれ、読者との交流を豊かにした。⁶⁾

婦人之友社は、現在まで続いている雑誌『婦人之友』(明治四十一年〜)の創刊とともにスタートした。「家庭」や「生活」をテーマとする『婦人之友』は、子どもの教育についても扱っ

ていくなかで、『子供之友』の創刊を準備していく。

詩人の河井醉茗からの依頼を受けて、『子供之友』の初代絵画主任となった楽天は、表紙をはじめとする雑誌のビジュアル面に積極的に関わっている。たとえば楽天が手がけた『子供之友』の表紙について、松本育子は次のように述べている。

楽天が手がけた連続41回は同誌において同じ画家が手がけた最長記録であり、モチーフや作風、構図のバリエーションに最も富み、『子供之友』においては『東京パック』（1905年創刊、有楽社）に代表されるグロテスクで辛辣な特性は鳴りをひそめ、子ども像を通じて多彩な表現を展開した。「…」モデルとしては、楽天が『時事新報』の「時事漫画」等で生み出した個性的なキャラクター、「茶目」や「とんだはね子」などのイメージと重なる。魅力的な子どものキャラクターで人気を得た楽天の力量が『子供之友』でも発揮され、ユーモアと健全な笑いに満ちた作風で表紙を賑わせた。⁽⁷⁾

松本は、楽天が手がけてきた風刺漫画との描き方の違いを強調する一方で、登場するキャラクターの連続性も指摘している。「楽天漫画」というと、どうしても風刺漫画のイメージが強くなるが、『時事新報』や『家庭パック』、『子供之友』などの新聞・雑誌に描いていた子ども向け漫画は、楽天の仕事をトータルに把握するためにも重要であろう。

『日本児童文学大事典』で「北沢楽天」の項目を担当した清水勲は、子ども向け漫画なども踏まえて、次のように記してい

る。

時事新報社へ入社。同社に三〇年間勤め、日曜付録「時事漫画」、雑誌「少年」などの編集にかかわる。またその「少年」の一九〇四年一〇月号より、〇七年六月号まで、毎月のように童話や絵断を掲載した。「…」〇八年、有楽社より創刊の子ども雑誌「フレンド」の編集にもかかわり、〇三年創刊の「少年」（時事新報社）と同様に子ども漫画を盛んに描く。「…」〇二年からはじまった時事新報日曜漫画欄「時事漫画」にいくつかの連載漫画を描くが、その中に茶目・凸坊という子どものキャラクターを登場させ流行語になるほどの人気を得る。彼らは子ども漫画における最初のヒーローとなった。前述の「家庭パック」や一四年創刊の「子供之友」（婦人之友社）にも楽天の子ども漫画や童画が数多く描かれた。大正期の「時事漫画」欄や日曜付録「時事漫画」にも子ども漫画欄が設けられて、楽天・小川治平・長崎拔天らが執筆した。二五年三月、「時事漫画」はクロスワードパズルを掲載して人気を得、大流行のきっかけをつくった。二八年二月、「時事漫画」は「とんだはね子」を連載する。これはおてんば少女を主人公にした本格的な六コマ連載漫画で、少女漫画の原点となる作品である。⁽⁸⁾

じつは、楽天が勤めていた時事新報社では、雑誌『少年』や子ども雑誌『フレンド』を刊行しており、楽天はその編集に携わるとともに、自身も子ども向け漫画を発表していった。『時

『時事新報』や『家庭パック』、『子供之友』に発表された作品は、その延長線上に位置づけられるものであったのだ。

それは、『時事新報』の日曜附録として独立した『時事漫画』（大正十年二月～昭和六年六月）にも受け継がれていく。雑誌の形に近づいたことで、『東京パック』などと同じくカラー刷りとなるのだが、楽天漫画のカラー化は徹底しており、のちに刊行される『楽天全集（全七巻）』（アトリエ社、昭和五年十月～昭和六年四月、全九巻刊行予定のうち第四巻・第八巻は未刊）も、全集としては珍しい全頁カラー刷りとなっている。

楽天が「現代漫画の父」と呼ばれる理由について、清水は「漫画のカラー化」、「新聞の日曜漫画特集づくり」、「漫画のキャラクターづくり」、「漫画制作のプロダクション化」を挙げているが⁽⁹⁾、昭和七年に時事新報社を退社し、翌八年には自宅アトリエに「楽天漫画スタジオ（三光漫画スタジオ）」を設けたことで、楽天は「現代漫画の父」の条件を満たすこととなった。

三、楽天と「手塚治虫」

「現代漫画の父」であることが確認されたかに見えた楽天であるが、大正期に人気を博した岡本一平の評伝のタイトルは『漫画と小説のはざま——現代漫画の父・岡本一平』（文芸春秋、平成六年二月）となっている。これは『増補 一平全集（全二十巻）』（大空社、平成二年十月～平成三年十二月）の編集を務めた清水勲と湯本豪一によるものであるが、全集の編集作業を経て、一平に「現代漫画の父」を見るような修正が加えられたとも言えるだろう。つまり、この二人の間に「近代漫画／現代

漫画」を隔てるものが見出されたのだ。

子ども向け漫画に注目した竹内オサムは、「楽天／一平」を対比させて、次のように述べている。

奇想天外な物語構成やヒーローの活躍という、今日数多くみられる子ども漫画の原型は、明治期の楽天よりも大正期の岡本一平の（絵ばなし）に、その先駆を見いだすことができるだろう。ヒーロー像やコマ展開などにおいては、楽天よりも一平の仕事の方に、今日につながる子ども漫画の流れを感知することが可能だ。⁽¹⁰⁾

ここでは、一平漫画の「ストーリー」が、「現代漫画」の条件として認められているのだ。

じつは、手塚治虫も、「楽天／一平」を対比的に捉えているところがある。円本ブームに刊行された『楽天全集（全七巻）』（アトリエ社、昭和五年十月～昭和六年四月）と『一平全集（全十五巻）』（先進社、昭和四年六月～昭和五年八月）が実家にある、小学生の頃から読んでいたという手塚は、「楽天の絵はすぐく外国マンガに近くて、一平のマンガはどこか仏くさい」という言葉に続けて、次のように語っている。

何より好きだったのは、楽天の世相漫画でした。それも主人公が特定の性格をもっていて、ずうっと続いていたものなどですね。「…」最先端の風俗をぱつと取り入れて、一つの象徴にしたててしまふんですよ。一つのキャラクターにね。この庶民性、機知というか、こういうものが、ぼ

くは一般庶民にすぐく受けたんだろうと思うし、ぼくなんかも、それでおもしろがって読んでいたんです。それぞれにきちんと性格が描き分けてあって、その性格の描き分け方が、ぼくの漫画にすぐく影響を与えてるんです。⁽¹¹⁾

一平ではなく、楽天からの影響に言及しているのが興味深い。手塚は楽天の「キャラクター」のほうに、「現代漫画」や自身の漫画との連続性を見出しているのだ。⁽¹²⁾

他にも手塚は、「楽天のタツチなりアイデアの中に、国際的なおいがして、国際カラーの政治マンガが描けて、それが『時事新報』の福沢諭吉に、買われた理由だと思うわけです」、「楽天は硬派、硬いタツチでありながら、外へ外へと問題提示を広げていったのに対し、一平は「世界の中で日本はどうかというような、国際的な視野での風刺とか批評は、まったく彼の興味の外」で「中へ中へと自分をひき込んでいった、との印象も語っている」⁽¹³⁾。

手塚が言うように、『東京パック』には国際漫画雑誌としての側面もあった。漫画のキャプションに注目すると、楽天が主宰した第一次『東京パック』には、英文だけでなく中国文も併記されていることに気づく。このような楽天の「国際的なおい」（手塚治虫）は、どのように捉えたら良いだろうか⁽¹⁴⁾。楽天自身は次のように語っている。

東京パックの創刊は時恰も日露の戦争に際し、我軍連勝して国民衝天の意気を其まゝ漫画に表はしたので大いに時好に投じ発行部数は当時の刊行物のレコードを破った。

東京パックは世界の最強国に勝ちたる新興日本を知らんとする列国民の為に日本の国情を理解せしめ、日本人の意気を発揚せしめんと抱負の下に所載の漫画全部を英語と支那語を以て解説を加へた為め海外にも多く流布するに至った。これ等の計画はすべてパックの発行元、有楽社主の方寸に出でたるものにて其慧眼に感服したのである。⁽¹⁵⁾

風刺画や漫画は、キャプションの文字を読むことができても、同時代の文脈を押さえなければ十分に理解できない。また一方で、読者はキャプションの文字を超えて、文脈を付与することもあるだろう。

楽天や第一次『東京パック』が行った「風刺」とは何だったのか。それらを明らかにするためにも、あらためて同時代の漫画家たちのネットワークを調査するとともに、時代状況と丁寧な照らし合わせながら、「風刺」の文脈を検討する必要があるだろう。そこには「キャラクター／ストーリー」に回収されない漫画の問題が、眠っているかもしれない。

「日本近代風刺漫画の祖」である北沢楽天とは、未来に向けて「漫画とは何か」を問いかけてくれる存在であるのだ。

注

- (1) 「漫画会館—北沢楽天・漫画のルーツ—」(<https://www.city.saitama.jp/004/005/002/003/001/001/mangahumor.html>)、平成三十一年二月十五日閲覧)。
- (2) 加太こうじ「北沢楽天」(日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第一巻』講談社、昭和五十二年十一月)、四百八十三頁。
- (3) 石井潤「東京パック」(日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第五巻』講談社、昭和五十二年十一月)、二百八十七頁。
- (4) 『東京パック』の刊行期間は、以下のようになっている。「第一次」(明治三十八年四月〜明治四十五年五月)、「第二次」(明治四十五年六月〜大正四年十二月)、「第三次」(大正八年八月〜大正十二年六月)、「第四次」(昭和三年七月〜昭和十六年三月)。
- (5) 関口安義「北沢楽天」(日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍、昭和六十三年四月)、百九十頁。
- (6) 斎藤寿始子「子供之友」(日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍、昭和六十三年四月)、二百七十三頁。
- (7) 松本育子「画家たちが描いた『子供之友』の表紙——その表現をめぐって」(松本育子・高木佳子編『描かれた大正モダン・キッズ 婦人之友社『子供之友』原画展』刈谷市美術館・板橋区立美術館、平成二十八年二月)、二百頁。
- (8) 清水勲「北沢楽天」(大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第一巻』大日本図書、平成五年十月)、二百四十四〜二百四十五頁。
- (9) 清水勲「北沢楽天(一八七六〜一九五五)」(酒井忠康・清水勲編『大正前期の漫画 近代漫画V』筑摩書房、昭和六十年十二月)、四十七頁。
- (10) 竹内オサム『子どもマンガの巨人たち——楽天から手塚まで』三一書房、平成七年九月、二十七頁。
- (11) 手塚治虫・石子順『手塚治虫 漫画の典義』(講談社、平成四年十二月)、

三十〜三十一頁。

- (12) 大塚英志は、楽天漫画を取り上げたうえで、「キャラクターを「俳優」とみなす感覚は手塚治虫のスターシステムに繋がっていきます」と説明している(大塚英志/作、ひらりん/まんが『まんがでわかるまんがの歴史』角川書店、平成二十九年十一月、三十二頁)。
- (13) 注(11) 前掲書、二十二〜二十四頁。
- (14) 楽天が昭和十七年に結成された「日本漫画奉公会」で会長を務めたことは、「国際的なおい」(手塚治虫)とつながるものと言えるかもしれない。「楽天漫画スタジオ(三光漫画スタジオ)」開設以降の楽天についてはあまり研究が進んでおらず、今後の進展が俟たれる。
- (15) 北沢楽天「明治時代の漫画——東京パックを中心とせる」(『楽天漫画集 明治編』グラフィック社、昭和四十九年五月〔初出』『東陽』昭和十一年十月)、二百十九頁。

【参考文献】

- ・清水勲『日本 漫画の事典』(三省堂、昭和六十年六月)
- ・清水勲『日本近代漫画の誕生』(山川出版社、平成十三年七月)
- ・清水勲『年表 日本漫画史』(臨川書店、平成十九年六月)
- ・徐園『日本における新聞連載子ども漫画の戦前史』(日本僑報社、平成二十四年三月)
- ・鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史I——絵入本から画帖・絵ばなしまで——』(ミネルヴァ書房、平成十三年十二月)
- ・竹内オサム・西原麻里編著『マンガ文化 55のキーワード』(ミネルヴァ書房、平成二十八年二月)
- ・夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』(ミネルヴァ書房、平成二十一年四月)
- ・『子供之友原画集4 北沢楽天』(婦人之友社、昭和六十一年三月)